

氏名	森長 新
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成17年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	万葉集歌人研究 — 大伴家持を中心に —
学位論文審査委員	主査・教授 渡邊 護 教授 江口 泰生 助教授 今津 勝紀 助教授 田仲 洋己

学位論文内容の要旨

本論文は、大伴家持が、実質百年に及ぶ万葉和歌の伝統を一身に受け止める万葉最終の歌人であることから、彼の作品に見られる伝統の継承の面と、彼が切り開いた新歌境の面とを、それぞれの作品論をとおして明らかにすることを目的としている。

内容は既発表論文8編を柱とし、それらに補筆訂正並びに新規の書き下ろしを加えて構成されている。具体的な分量としては、A4版ワープロ打ちで151ページ、400字詰め原稿用紙で612枚になる。

第一章 万葉歌の手法

万葉集に見られる作歌手法のうち、大伴家持に関連するものを中心に考察している。

第一節「即興歌の手法——万葉集の『即』についての一考察」は、万葉集中の題詞や左注に見られる「すなはち」について考察した。「すなはち」の一語は、作者の立場また編纂者の立場から、それぞれ、目的をもった必然性のある表現であったことを明らかにした。また、「すなはち」が記された歌には、前歌あるいは古歌を利用するという「即興歌の手法」とでも呼べるものがあることを指摘した。

第二節「『いかにか』考」では、「いかにか」という語が、極めて挽歌的な性質を帯びた語であり、山上憶良の「日本挽歌」を接点として、柿本人麻呂の「近江荒都歌」の代表的感動を継承する流れと、大伯皇女を源とする挽歌的な歌の流れとを、それぞれ大伴家持の「悲傷亡妾歌」が受け止め、活かしていることを述べている。

第三節「大伴三中の歌」では、大伴家持と同族の三中がかつて遣新羅使の副使であったときに、現在国守である家持と同様の詠作法を用いていることを考察している。

第四節「『思ふどち』とうたう歌」は、家持が好んで用いた「思ふどち」の語を持つ歌の考察である。この語がその発生から宴席歌に特有のものであること、またその一首は宴席歌の納め歌として機能することが多いことを指摘した。

第二章 万葉歌の伝統——大伴家持の伝統継承——

万葉歌の伝統の継承という点に着目した大伴家持の作品論である。

第一節「松が枝を結ぶ心は——活道の岡宴歌の論——」は、天平十六年正月十一日、久途京付近活道の岡での宴席歌二首（6—〇四二～三）の考察。家持の歌—〇四三は、これまで言われているような「松が枝を結ぶ」ことによって長寿を祈る歌ではなく、「松が枝を結ぶ心」とは、宴に集う一同の結束心を意味するのであり、一首はそれを呼びかけた歌であろうことを明らかにした。

第二節「哀傷長逝之弟歌と思放逸鷹夢見感悦作歌」は、これら二作の関連の考察である。書持挽歌は、その根底に家持が今越中にあること、つまり旅にあることの嘆きであり、鷹の歌は、その経験を下地にしたものであることを述べている。

第三節「述拙懐歌考」は、万葉集中の題詞や左注に三箇所見られる、この記述を持つ歌の考察。述拙懐歌は、万葉の「拙懐歌」の流れの末流に位置すると捉えられ、家持の想像力が十二分に発揮された幻想的なものであり、その幻影が宮の内に及んだ場合にこの記述が一樣に記されている。したがって、歌稿の記述がそのまま残ったものではなく、編纂者としての記述であることが認められることを述べている。

第四節「花縵の要因」は、天平勝宝二年三月三日に越中国守大伴家持宅で催された宴席での歌三首（19 四一五一～三）についての考察である。一般にこの宴は、上巳の宴と考えられているが、そうではなく、四一五三の「花かづらせな」に着目するならば、成女戒あるいは婚にまつわる宴ではないかと考えられることを述べている。

第三章 万葉歌の革新——大伴家持の新歌境——

大伴家持の新歌境とされる越中秀吟十二首（19 四一三九～四一五〇）についての作品論である。

第一節「『眺矚春苑桃李花作』と題する歌二首」は、いわゆる「越中秀吟十二首」冒頭二首について、題詞と歌との関係を考察したもの。四一四〇は、題詞と歌の内容とが矛盾しているように思われるが、このような矛盾（四一四一も同様）は、この題詞の記述が詠作時のものではなく、十二首をひとまとまりの作品として構成しようとする意識によって意図的に記されたことを明らかにした。

第二節「『聞けば』とうたう歌」は、「聞けば」の表現を持つ歌についての考察。これらの歌が、「（声、音）を聞けば（感情表現）」という形をのものと、「耳をすますと」の意のものとの二分されること、後者は「見れば～見ゆ」の物ボメの形式とも違った独自の在り様を呈していることを確認した。つまり、それらの歌は、強く現場性を持つこと、そして、そこにある「我」の意識が強く看取されることを述べた。

第三節「『見る歌』から『聞く歌』へ——越中秀吟十二首の構成と成立——」は、十二首がいかんして生まれ、いかなる意識で作品として構成されたかの考察である。十二首が、三月三日を意識したが故の幻想に始まる望郷の念から、越中に独りある「我」の孤愁へと変化展開すること、そしてそれが題詞の記述によって「見る歌」から「聞く歌」へという構成に仕立てられていることが看取されることを述べている。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2005年2月2日、学内審査委員4名によって行った。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、大伴家持が、実質百年に及ぶ万葉和歌の伝統を一身に受け止める万葉最終の歌人であることから、彼の作品に見られる伝統の継承の面と、それをもとに彼が切り開いた新歌境の面とを、それぞれの作品論をとおして明らかにすることを目的としている。

本研究では、まず万葉集全般に見られる作歌手法をめぐり、特に大伴家持がそれらをどう消化し応用したかを考察している。なかでも即興歌の手法、万葉集中の「いかにか」、「思ふどち」など語句の使用実態、その特徴等を明らかにした。また同族の大伴三中の歌について論じ、その詠法が家持に通じることを指摘した。

万葉歌の伝統継承という視点からの大伴家持の作品論として、活道の岡宴歌二首、哀傷長逝之弟歌と思放逸鷹夢見感悦作歌、述拙懐歌三例、天平勝宝二年年三月三日の宴歌三首それぞれについて論を展開し、家持の板とその人生が密接であることを主張した。

大伴家持の新歌境といえる、いわゆる越中秀吟十二首についての論では、歌と題詞との関係、「聞けば」とうたう歌など、十二首の構成と成立の本質に関して論を展開している。

以上のような論のおおかたの主張は認められるとして、いくつかの問題も残された。たとえば、一語の微妙な違いに対する吟味が多少不足していること（例、「いかにか」と「いかにか」の違いなど）、そして成女戒に関し、それを立后と結びつける点において、整合性に疑問が残ることなど、である。

内容的に、説明の不足から、大伴三論が全体の流れにそぐわないことなど、また題目からいって、歌人大伴家持の新歌境を述べるために必要不可欠なのは、やはり絶唱三首（19四二九〇～二）であろう。残念ながら、本論文ではそこまで論述が及ばなかった。

家持の歌境の到達点とされる歌についての考察は、歌人大伴家持論確立のための今後の大きな課題として残るであろう。

但し、本論文が多くの先行説をふまえつつ、新たな角度から大伴家持の新歌境に切り入った意義は大きい。課題は残るにしても、最終的には本論文が学位に値する成果を有していることは確かである。

審査委員会は、以上の経過により、本論文を学位論文として認定することについて、全員一致で合意した。